

大好きだったおばあちゃん

小 六

ぼくは今、おばあちゃんと仲がよくありません。昔はよくお話をしたり、いっしょにテレビを見たりして、おばあちゃんのことを大好きでした。しかし、今、ぼくにはんこう期がきてしまい、おばあちゃんのことを大きらいになってしまいました。

おばあちゃんは、ぼくが帰るといつもいろいろ話しかけてきたり、いろいろ聞いてきたりします。

「今日は、学校で何があったの。」

「この洗たく物はだれの。」

「今日、ゴルフに行ったんだけど、あまりいいスコアじゃなかったんだ。」

いつの間にか気付かないうちに、ぼくはおばあちゃんのことやうつとうしく思えてきてしまったのです。おばあちゃんしんしんは、ぼくのことを知りたくて興味津々しんしんで聞いてくるのに、ぼくは、

「うつとうしいんだよ！ めんどうだから何も聞いてこないで！」

と強く当たってしまいました。しかし、心の中には、「なんであんなに強く言ったのだろう。」と困ってしまいう自分もいます。謝ろうかなと思う自分がいる一方で、はんこうしてしまう自分がいて、結果的に何も言えませんでした。「なぜおばあちゃんに強く当たってしまったんだろう。お母さんやお父さんには、そんな風にはできないのに……。なぜなんだろう。」と考えてみました。きっとぼくは、「おばあちゃんにだったら何を言ってもだ

いじようぶなんだ。」と考えていたのではないかと思いました。

そんなある日、またおばあちゃんに強く当たってしまいました。しかも、この日はいつもより強く当たってしまい、おばあちゃんを深く傷つけてしまいました。ぼくは、さすがに言い過ぎたと思い、とつさに反省の手紙を書きました。すぐそばにあった自由帳の切れはしに。ごめんなさいが伝わればと思つて。

「いつも強く当たつてごめんなさい。毎日、毎日、苦勞をかけているのに、ほんこうしたりしてごめんなさい。いつもありがとうございます。」

すると、おばあちゃんはこれを読んで、泣き出してしまいました。ぼくも素直な気持ちを言えたのがうれしくていっしょに泣き出してしまいました。

ぼくは、おばあちゃんにだったら、何を言つてもいい、と思つていました。でも、実は、おばあちゃんは、ぼくが言う一言一言に、悲しんでいたのかもしれない。ぼくの心の中で思つていたおばあちゃんに謝ろうという気持ちを、ふだんから素直に伝えていればよかつたなと思ひました。

だれであつても、自分のイライラした気持ちをそのままぶつけてしまうと、今回のようなことになるのだと思ひます。でも、相手の顔を見て、心の中をのぞきこむと、本当にその気持ちをぶつけてもいいのか疑問に思えてきます。だからこそ、ぼくはいつまでも素直な自分ではないです。